京都大学
ティーチング・アシスタント
活用事例集

平成24年3月

教育制度委員会

京都大学では、本学の教育上の基本理念「対話を根幹とした自学自習」を推進するための一つの方策として、第二期中期計画において、ティーチング・アシスタント（以下ＴＡ）の拡充を推進することとしています。

このことを受けて、教育制度委員会ではＴＡ拡充のための方策を検討し、その一環として各研究科から優れたＴＡ活用事例の提供を受けてこの「京都大学ティーチング・アシスタント活用事例集　　」をまとめましたので、今後のご参考にしていただければ幸いです。

京都大学教育制度委員会

「第2次大学院教育振興施策要綱」（平成23年8月5日）においても、「大学教育の質を高めるため、TAの取組を充実し、修士課程・博士課程（前期）等の教育活動の中で組織的に推進する」ことが掲げられています。

Contents

1 レポート等の添削（正課） 1

2 演習支援（正課） 4

3 実習・実験支援（正課） 6

4 その他（正課） 7

5 その他（課外） 9

1 レポート等の添削（正課）

学部1回生向けの講義では、2週に1回程度、それなりの分量のレポートを学生に課しており、その添削をTAに依頼している（※）。

その際、TAに対しては、**問題と解答例を事前に渡し**、質問があれば適宜相談に来るように指導しているため、支障はない。

添削作業においてはアカハラと見なされることのないように、添削の文面や言葉遣いについて始めに指導しているため、これまでその点で特に問題が生じたことはない。

※採点作業において、点数をつけることまでTAには依頼していない。教員側で添削内容のチェックと点数付け、データ入力、及び学生に配布する略解・講評の作成を行っている。教員の負担を考えるとこれらの作業の一部もTAに行ってもらえると助かるが、二度手間の恐れもあるため現在はこのようなやりかたをしている。

全学共通教育科目において、講義中に与えた課題に対する**レポート**をTAに**採点添削**させ、その**結果を学生に返却**している。

教員側としては学生の理解度をレポートの内容から知ることができ、講義の進め方の指針の１つとしている。

また、学生にとっては、自分の理解度を知る良い機会となり、返却されたレポートが復習の端緒となる。

大学院の演習科目で毎回実施している**レポート試験の採点（コメント付き）**を、TA（博士後期課程）に依頼している。

このレポートは、学習内容の即時強化を狙ったものである。TAは、**教えられる側の視点から採点しコメント**するので、受講生にとっては、教員の採点・コメントにはない有用性がある。

またTAは、**将来の教育業務の実習**になるとして、この課題に積極的に取り組んでいる。

採点・コメント付きのレポートは、次回の演習で受講生に返却し、教員による問題の解説と照らし合わせながら、レポートの内容を点検してもらっている。

学部２年生を対象とした授業において、ほぼ毎回、出席をとる代わりに基本的な演習問題を学生に課しており、適宜中間テストを行っている。

これらの**答案の採点を当該科目が苦手なＭ１のＴＡに行わせている**。解答を与えずに採点をさせるので、ＴＡ自身にとっての**復習**になり理解が深まるとともに、答案の採点、添削を通して「学生がどういう筋道で考えているのか」を知る経験が得られ、良い訓練になるものと思われる。

大講義でのＴＡの活用方法

（1）授業評価の一環として、毎回の授業内容の復習（教科書の該当部分や配布資料の要約・論評など）になるミニ・レポートを課している。そのなかから優秀レポートを選び出し、次週の授業での配布レジュメで、優秀例として発表しており、**当該優秀レポートの選定と講評の作成**に、TAを活用している。この職務のためには、該当書籍を精読・理解する必要があり、**TA本人の知識・能力開発**になると同時に、受講**学生のレベルの把握**などの教育の開発にもなると考えている。

（2）期末試験や期末レポートの**採点基準案の作成とその妥当性に関する教員との議論**、そして確定した採点基準を用いて、二人のTAに**独立して下採点を行なわせている**。そして最終得点の確定は、教員が行なっている。つまり、擬似トリプル・マーキングを行なっている。そして、（1）のミニ・レポートと同様に、**採点結果と授業アンケートなどの相関関係などを分析**し、教員が作成する採点講評とともに、受講者に通知している。手間がかかるが、この活用方法でも、TA自身の**問題分析能力と共に、教育能力の開発**を目指している。

2 演習支援（正課）

学部学生を対象とした演習科目で、専門分野における最新のテーマについて情報収集、および討論を行う演習を行っている。TAには、この**ディスカッションのチューター**として、司会を担当し、学部学生の討論が活発になるように助言してもらったり、発表会での質問やコメントをしてもらっている。

このディスカッションでは、**身近な立場から**資料の準備の手伝いを行い、**討論の流れを十分把握し、適切なアドバイスを与える**必要がある。教員だけでは到底これをカバーできず、TAを用いている。

研究方法の基礎を学ぶ基礎演習において、学生たちをグループに分けて文献調査・発表を行わせている。その際、TAには、**基本的なオリエンテーション（文献調査の進め方やレジュメの書き方に関する説明）を担当**させるとともに、学生たちのニーズに応じた支援の提供を求めている。

このような支援は、学生たちが研究力量を身に着ける上で不可欠であるだけでなく、TAを経験した院生にとっても、研究者として将来、**学生指導にあたる上での力量形成の機会**として意義が大きい。

TAがより積極的な役割を果たせるよう、**演習の内容に関する計画についても、担当教員とTAが共同で綿密な検討を**行っている。

なお、研究室において**学年縦断の人間関係が形成**されることにより、インフォーマルな形での知の継承も活性化されている。

小規模講義でのＴＡ活用法

（1）出席確認と、毎回、**グループ・ワークの編成替え案の作成**を求めている。これは、前回授業のグループ・ワークであまり発言しなかった受講者などが固まらないようにするなど、受講生の受講態度を踏まえて決定させている。これによってTAの、**受講態度や発言内容を正確に把握する能力を養成**している。

（2）**グループ・ワークの議論のファシリテーター**をさせることによって、授業内容をTA自身が正確に把握する能力だけでなく、受講生を同様な理解に導く**議論の誘導能力を養成**している。

（3）**課題の採点基準案の作成と、その妥当性に関する教員との議論、そして確定した採点基準を用いての採点**を行なわせている。

（4）**最終成績と授業アンケートなどの相関関係などをTAが分析**し、教員が作成する採点講評と共に受講者に通知している。

3 実習・実験支援（正課）

学部学生を対象とした実習科目で実験技術の基本を学び、実習指導を通じて技能を修得するための実習を行っている。TAには、この**実習のチュータ**として、**実験機器の操作法、実験技術に関する資料の紹介、およびその実演に関して助言**してもらっている。

3回生対象の実験演習では**実験装置の製作からその動作テスト、データ取得、処理**まで**履修学生と大学院生のTAが共にアイデアを出し、議論し合いながら行なっている。**

教員が指導すると、ほとんど自分たちでは考えずに鵜呑みにしてそのまま実験をする傾向があるが、年齢も近いTA相手だと気楽に意見を言い合って、自分たちで工夫ができるようである。

1学期に5週間行われる**実験授業のうち2週間分をTAが担当**する体制を取っている。TAに実験授業を担当させるに先立って、実験機器の準備や使用方法、実験の指導方法、データ処理の方法、実験データの考察方法について、**十分な事前指導**を行っている。TAが2週間の間、一人で実験授業を担当することで、TAにとって学部学生への**指導力や実験指導上のトラブルを克服する能力**を向上させる良い機会となっている。

TAにあたる学生がこれまで培ってきた**実験技術をとりまとめマニュアルを作成させる**とともに、実習指導により、その技術を他の学生に伝承した。

4 その他（正課）

民間企業やNGO、地方公共団体、国際機関などから6人の外部講師を招き、基本的に英語で地球環境に関する多岐に亘る内容の講演会を開催している。この講演会は図書室で閲覧できるビデオライブラリーとして記録されており、TAには**記録活動**を担当してもらっている。

またTAは、**レポートの採点**に加え、時に留学生から日本語の**講演を英語に通訳、要約する**ことも求められることがあり、本マネジメントセミナーの運営にTAは欠かせない存在となっている。

学部学生にとってTAは、研究室での研究内容や研究生活についての情報を得るための情報源ともなっている。学部学生が、将来希望する研究室を決める際に、実験の合間にTAから得た情報が参考になっている場合もありえる。

今後TAに、講義の一環として、学部学生に対する研究室紹介や研究発表の機会を与えることができれば、学部学生にとっては有益な情報を得る機会となり、またTAにとっては**分野外の人に研究内容を説明する能力を身に付ける**機会となり、したがって双方にとって良い刺激になると思われる。

「科学英語」では、将来プロフェッショナルとして研究を行う際に生じるコミュニケーションツールとしての英語の必要性を早い段階から認識してもらうため、TAに**自分の研究歴やキャリアにおける英語の必要性や経験などをプレゼンテーション**してもらう機会を授業の中で設けている。学生にとっては、具体的な経験をシェアすることで、良いモチベーションになっているようである。

学部生を対象に、コンピュータを使った情報収集や解析に関する演習を行っている。学部生のコンピュータスキルには大きなばらつきがあるので演習を円滑に進めるために、TAには、コンピュータに不慣れな学生を中心にフォローアップをお願いしている。

京都大学の吉田キャンパス・桂キャンパス、海外の２大学の４元で、**双方向型の同時遠隔講義**を実施している。

この授業では、吉田・桂のそれぞれのキャンパスにＴＡを配置し、以下の授業運営補助を行っている。

①事前準備（1-1授業パワーポイントファイルの講師からの受け取り、1-2それのシステムへのマウント、1-3授業資料の準備（パワーポイントの印刷、専門用語の和訳リスト作成））、②授業実施補助（2-1スライドシェアリングソフト、テレビ会議システムのオペレーション、2-2インターネットのチャットを利用した他の遠隔教室との連絡、2-3出欠、2-4その他講師補助）、③授業後の業務（3-1レポートの回収とそれの講師への送付他）

5 その他（課外）

【留学生が主導する国際的研究交流の支援】

2年前より「ほっこりカフェ」と称して、1年に1ー2回、海外からの留学生に出身国の風土と文化、歴史、農業をはじめとした各種産業などを紹介してもらっている。この企画は講師役の留学生と参加者の双方から好評をいただいている。

現在は留学生にまったくのボランティアとして講演を頼んでいるが、このような講演をお願いするときに留学生をTAとして採用できれば、企画をオーソライズできるだけでなく、構想・立案・実施に関与することで留学生自身の能力向上に資するとともに、留学生への経済的な支援にもなる。

【多言語・多文化環境でのフィールド適応力向上への支援】

留学生をＴＡに採用し、講師として学内で種々の地域語の学習を目的とする語学教室を開催する。学内には、世界中の様々な国と地域を研究対象としている研究者がおり、実際に現地に調査に行っている場合も多い。その中には英語のようなメジャーな言語だけでなく、地域語のようなマイナー言語が話されている場所がある。国内ではこのような地域語の学習機会を提供する場が極めて少ない。本学にはそのような国、地域から留学している方もいるので、その留学生に言語指導をしてもらえれば、研究へのメリットだけでなく、留学生への経済的支援、国際交流の点から極めて有意義である。また、地域語への着目や学習環境の整備は、国際化教育への具体的取り組みの先駆的事例として、京都大学への外部評価を高める実績となることが期待される。